

秦から漢へ：その二十余年のこと

町田, 三郎
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/18082>

出版情報：中国哲学論集. 10, pp.41-56, 1984-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

秦から漢へ

— その二十余年のこと —

町田 三郎

一

呂后八年七月、呂后没。その九月に追いつめられた呂産らは謀反を企てるが、陳平周勃らに制圧され天下は再び「劉氏」に回帰する。呂氏のかいらいであった少帝弘は帝位から降され、変つて高祖の中子代王桓がその座に迎えられることとなった。この報せをうけて代王の周辺では諸呂の謀反肅清とひき続いた血腥い事件の直後のことだけに京師でさらに何が起るかわからず、しばらく病気を口実に様子を見るのが良いとする慎重論が強かった。この時中尉宋昌は現状をこう分析しながら代王に都入りをすすめる。「群臣の議は皆な非なり。夫れ秦その政を失ひ、諸侯豪傑並び起る。人々自らこれを得んとおもえる者万を以て数う。然るに卒に天子の位を踐む者は劉氏なり。天下望を絶つ。一なり。高帝子弟を封じ、犬牙に相い制す。此れ所謂る盤石の宗なり。天下その疆に服す。二なり。漢興り、秦の苛政を除き法令を約にし、徳恵を施す。人々自ら安んじ動揺し難し。三なり。夫れ呂太后の蔽を以て諸呂を立て、三王と為し權を擅にし制を専らにす。而れども太尉一節を以て北軍に入り一呼せば、士は皆な左袒して劉氏の為にし、諸呂に叛きて卒に以てこれを滅す。此れ乃ち天授にして人力に非ざるなり。今大臣変を為さんと欲すと雖も、百姓ために使われざらん。その党寧ぞ能く専一ならんや。方今内に朱虚東牟の親あり、外は呉楚淮南琅邪齊代の疆を畏る。(四なり)。方今高帝の子は、独だ淮南王と大王とのみ。大王また長じ賢聖仁孝天下に聞ゆ。故に大臣天下の心に因りて大王を迎えんと欲するなり。大王疑うこと勿れ」(孝文本紀)

総じてここに示された宋昌の劉漢安定説は正しい。そしてここで安定したとされる漢の国家体制は、諸侯王が犬牙

の如くに噛み合つて藩屏となりさらに呉楚淮南等の大国が外の衛りを固めるといったいわば周代的な封建体制であった。しばらくの時をおいて賈誼はいう。「以為うに漢興りて二十余年、天下和洽す。宜しく当に正朔を改め服色を易え、度を制し官名を定め、礼楽を興すべし」(賈誼伝)と。漢王朝独自の制度を設けよというのである。国家が安定しているからこそこうした発言もあり、その独自性を制度として表象したいというわけである。むろんこの時期、国の内外に問題が全くないわけではない。しかし高祖が帝位に即いて二十年、呂氏一族も誅滅され新たに文帝が天子として擁立されようとする時、宋昌の現状分析にいうとおり、漢王朝はいちおうの安定期を迎えつつあった。

二

『史記』始皇本紀二十六年の条に、十七年韓王安、十九年趙王遷を虜とし、二十二年魏王假を降し、同年荆王負芻を捕え、二十五年燕王喜、そして二十六年斉王建をえて六国は盡く平定され「秦初めて天下を并す」こととなった。その領域は「東は海および朝鮮に至り、西は臨洮・羌中に至り、南は北向戸に至り、北は河に拠りて塞を為り、陰山より遼東に至る」とある。まさに古今未曾有の大帝国の出現であった。

この世界そのものともいべき領域に始皇は「皇帝」として君臨し、全土を三十六の直轄地を意味する「郡県」に分け、これを自らの手足であり意志でもある「官僚」群によって支配せしめた。むろん強大な権力を背景にしてのことであるが、この支配の方式を補完するものとして、文字・通貨・度量衡の統一や情報伝達のための馳道・郵驛の設置建設があった。むろんこれらの統一が容易でスムーズであったとは考えられない。広大な中国が等質的に存在したとはどうも思われないからである。

始皇帝は郡県制の採用を、従来の封建制の限界をつき破る正しい政治方式であると確信していた。これは丞相王綰らの遠隔地支配のために封建諸侯王をたてよとするのに答えて、自ら「天下共に戦鬪の休まざるを苦しむは、侯王あるを以てなり、宗廟により天下初めて定まる。また復た国を立つるは是れ兵を樹つるなり。而してその寧息を求むるは豈に難からずや」(始皇本紀)の言にみて明瞭である。こうして郡県制は、広大な中国を一元的に支配するための新方

式として、政治的に未経験な部分や不安材料をも内包しながら、ともかく秦の国家の骨格を形成するものとして採択され、歴史の舞台に登場した。

それでは敢て選択されたこの体制は、成功したのであるろうか。咸陽の上層部の一部にはしばらく不満がくすぶるのであるが、これを押し切ってスタートしたこの体制は、現実には大きな齟齬もなく運営されていたようである。たとえば始皇本紀に地方の治安の悪さや行政の不円滑を思わせる記事もなく、雲夢秦簡中の「編年記」の南郡の記録にもこの地方が乱れた様子はない。組織的な反抗や不穏な動きは見当らない。たまたま始皇が盜賊に襲われたとの記事が本紀の二ヶ所に見えるだけである。

極廟や阿房宮の建築、また咸陽から各地に放射状に連接する馳道の造営には何十万という人員が徵発されている。三十三、四年の南北の軍事行動にはさらに多数の人員が駆り出されていよう。同じこの年に思想統制による坑儒事件も発生している。不平や不満がなかるうはずはなく、水面下に渦巻いているといつてよい。秦の新しい法治体制になじめず反抗する民衆も一部には存在しよう。雲夢秦簡の「語書」はこれらを「邪避淫失の民」と呼び、役人との結託を最も警戒している。あるいは有名な陳勝の期に遅れての決起にしても法令の不備、たとえば広域化した現状への対応の遅れがこうした事態を招いたともいえよう。

ここに始皇期のことを述べた二つの資料がある。「項梁人を殺し、籍と仇を呉中に避く。呉中の賢士大夫、皆な項梁の下に出ず。呉中大繇役及び喪あるごとに、項梁常に主辨を為し、陰かに兵法を以て賓客子弟を部勸す。是れを以てその能を知る」。これは項羽本紀に見えるものであるが、要するに項梁及び籍は、この地方の游侠のボスの存在で、彼らの差配に任せているとき繇役の人員徵発も喪事の順序次第も睨みが利いて滞りなく行われた、というのである。秦の役人、呉の県官らはこれが支障なくいつている限り黙ってその結果を受け取り利用すればよいわけである。別ない方をすれば末端社会の慣習にまで県官らは立ち入らない、乃至は立ち入れないことである。暗黙の了解といふべきであろう。この意味では秦簡の「爲吏之道」で役人は民衆の中に入って融和を図れとしきりに説くが、官庶自らなる限度は存したようである。

いま一つの資料。神儒家の侯生盧生は始皇帝が「天下の事大小となく皆な上に決す。上衡石を以て書を量るに至る。

日夜呈ありて呈に中らざれば休息するを得ず」と難じて「權勢を貪ること此の如し」（始皇本紀）と結論する。始皇帝は毎日一石、すなわち三〇キロの重さの木簡に記された上奏書類を決裁しないうちは休息もとれなかった。なんでも独占したいからこうなるのだと非難するわけである。しかし視点を少し変えれば、これは始皇帝の勤勉精勵ぶりを伝えるものであり、それは同時にこの時期の官僚機構の不備・運営上の不手際が、始皇帝にこうした膨大な仕事量を押しつけているということである。独占欲あるいは機構の不成熟によるものであれ、意志決定の極度の集中化は、もし不測の事態が発生した場合、対応の遅れを必然のものとする。そうした危険性を孕むものであった。つまりこの二つの資料は、はしなくも秦代官僚システムの上層と下層とにおいてそれぞれ重大な障害をもっていることを証明するのである。

ところで始皇帝が、新たに統一を完成したこの時点で政治的に恐れ警戒していたことがあったとしたらそれは何であろうか。一つは山東や会稽等のいわゆる僻遠の地の支配問題であろう。統一の年の翌二十七年から二十八年・二十九年・三十二年・三十五年と五次にわたって山東・南方地域への巡狩を行い、各地に刻石を建立している。皇帝の権力を誇示しかつ地方民衆を慰撫するためである。二世も即位すると早速この地方を巡狩している。「朕年少くして初めて位に即き、黔首未だ集附せず。先帝郡県を巡行し以て疆を示し海内を威服す。今晏然として巡行せざれば即ち弱られ、以て天下を臣畜することなけん」（始皇本紀）。いかにこれらの地方を重視していたかが知られよう。そしてこの地方の治績は刻石等からしてもそれなりに挙っていたとしていい。しかしこの問題は実は根深い。それはこの僻遠の地問題とは簡単にいえば、地方に生き残っている六国の後裔や名族の勢力をいかに圧えつけるかということだからである。第二は「胡」の問題。始皇三十年、始皇帝は不死の薬を求めさせた。「燕人盧生使いして海に入りて還る。鬼神の事を以てす。因りて凶書を奏録して曰わく、秦を亡ぼす者は胡なり。始皇乃ち將軍蒙恬に兵三十万人を發し北のかた胡を撃たしむ」（始皇本紀）。この話はやがて淮南子道徳訓などでは、本来「胡」というのは太子胡亥のことなのに始皇帝は見当違いをして遠く匈奴に備えて足もとをすくわれた、と笑い話にされるが、やはり中国本来の敵は始皇帝が考えたように匈奴とするのが正しい。胡に備えて長城を修復し、信頼する長子扶蘇、名將蒙恬にこの地の防衛を托すのは当然の措置であった。

秦の始皇帝が沙丘で病んで没し、二世がその跡を襲って三年にして趙高に謀殺され、その趙高が秦王子嬰に誅殺されたのが秦子嬰元年のこと、それは同時に項羽の天下に号令する時代であり、いうところの漢の高祖の元年でもある。こうして始皇没後わずか三年で、王朝は秦から漢へと推移する。さらに仔細にこの時期を点検するならば、二世の即位元年「七月、戍卒陳勝ら故の荆地に反して張楚と為し、勝自立して楚王となる」（始皇本紀）、また「山東の郡県の少年、秦の吏に苦しみ皆なその守尉令丞を殺し、反して以て陳涉に応じ、相い立ちて侯王と為し、合従西郷し、名づけて伐秦と為すは数うるに勝うべからず」（同上）ともある。こうして「万を以て数え」ともいわれた群小の反秦軍の中からやがて鉅鹿の決戦で動乱の流れを変え勇名を馳せた項羽に人望も集中し、項羽は咸陽を陥し子嬰も殺して秦の命脈を絶ち切った。この時項羽は楚の懷王を義帝に十八王を各地に封建して秦末の戦火をひとたびは収束する。しかし項羽が自らは西楚霸王と称して中原を留守にしたとき、再び中原の王者を目ざしての覇権争いが燃え上った。楚漢の争いである。漢の五年、高祖は項羽を垓下に追いつめ、十二月項羽は「自刎而死」（項羽本紀）、天下は劉氏の有に帰した。

つまり秦から漢への王朝の推移というものも、よりつめてみれば、二世皇帝―陳勝―項羽、時に子嬰が見えかくれし、項羽と劉邦の決戦のはてに漢六年以降の漢王朝の成立ということになる。それは時に中国の主人公が複数でもある時代を通過してのもので、これを『史記』に即してみるならば、

- ① 始皇本紀 李斯列伝
- ② 陳勝吳廣世家 張耳陳餘列伝
- ③ 項羽本紀
- ④ 高祖本紀

そして①から④を同時的空間的に処理しようとする⑤「秦楚之際月表」が参考され、これに⑥「呂后本紀」が続き、

國際關係を示すものとして⑦「匈奴列伝」がさらに続くことである。元來『史記』が陳勝を「世家」に入れ、項羽を「本紀」に扱い、呂后また高祖の皇后でありながら恵帝を排して「本紀」に記述されるのは、それぞれが一時的にもせよ実質的に天下の号令者であったと認めてのことである。

二世の元年七月、陳勝は意を決して反乱に立ち上った。「王侯將相寧んぞ種あらんや」(陳勝世家)だからでもあるが、大雨に際会して期日に遅れ、「今亡ぐるも亦た死し、大計を挙ぐるも亦た死せん。等しく死すならば国に死して可ならん」(同上)との悲壯な思いからであった。現実に隊伍を整え秦軍と戦う段になると、かれは自らの軍を「公子扶蘇・項燕」の軍と詐称する。秦の不運な公子と楚の名將との連合軍がここに不実な二世の國家に戦いを挑むという図式である。このことを世家は「民の欲に従うなり」という。部下たちがこう詐称して欲しいと願ったわけである。

やがて陳に進撃し、この地の三老豪傑らと議して張楚と号し自ら王となる。諸の郡県の秦の苛法に苦しむ者、大いにこれに附したとある。しかしこの時陳勝の幕下にいた張耳陳餘はこれに反対であった。「今始めて陳に至りて王たるは天下に私を示すなり。願わくは將軍王となるなくして急ぎ兵を引きて西し、六國の後を立てよ。(これ)自らの為には党を樹て秦の為には敵を益すなり……」味方を増して咸陽に攻め入り、以て天下に号令せば「帝業成らん」(張耳陳餘列伝)とするからである。ともかく六國の後を立てて私心のない戦いであることを天下に示し、いま恩徳を施して將來に備えよ、というものである。陳勝はこれに従わなかった。やがて輩下にいた趙王が自立し、燕も韓廣を立てて王とし、斉・魏もそれぞれ王を称する。一方秦もしだいに態勢を立て直し、章邯を將として反乱軍に当らせる。まとまりの悪い陳勝の軍は各地で戦い敗れ、下城父に追いつめられる。ここで陳勝は御者の莊賈に殺される。十二月のことである。王と称することわずか半歳であった。

この時点ではなお秦の軍隊が圧倒的に強力であったのだが、二世元年から二年にかけて陳勝を首として各地に「王」が自立し、有名無名の複数の地方政權が成立していた。彼らは時に武功により時に地方の名族のゆえをもって王を称していた。それでは陳勝の名言「王侯將相寧んぞ種あらんや」の如く、だれでも「王」になれたのであろうか。陳嬰の場合をみてみよう。かれはもと東陽県の令吏であった。県中に信謹を以て知られ長者と称されていた。たまたま県

の少年たち数千人が県令を殺して自立しその長を求めた。陳嬰が当てられた。やがてこの集団は拡大し二万人にもなった。一大勢力である。陳嬰を王にたてよとする声が高まっていた。その折り、

陳嬰の母、嬰に謂いて曰わく「我れ汝の家婦となりてより未だ嘗て汝先古の貴者あるを聞かず。今暴かに大名を得るは不祥なり。属する所あるに如かざるなり。事成らばなお封侯をえ、事敗るも以て亡げ易し。世の指名するところに非ず。嬰乃ち王とならず。その軍吏に謂いて曰わく「項氏は世々将家にして楚に名あり。今大事を挙げんと欲すれば、將にその人に非ざれば不可なり。我れ名族に倚らば秦を亡ぼすこと必せん」。是に於て衆その言に従い、兵を以て項梁に属す。(項羽本紀)

母親の意見に嬰が従い、嬰のことばに一軍が納得したというのは、発言がそれなりに筋が通っていて正当と考えられたからである。陳嬰の母の危惧をうけて陳嬰が決めた一軍の身寄り先きは、まさに陳勝も旗上げのさい名を籍りた楚の名將項氏の一族であった。衆の了解を得易い選択ではあった。

以上のことは軍功をたて衆に推されて王となることはありうることはあるが、いっそうの頂点をきわむべきものは由緒もある名家名族の特別の運気を保持するものでなければならぬことである。こう考えることが陳勝の初発のときや陳嬰の母のことばなどからこの頃の人々の通念でもあったように思われる。やや後次のものであるが、『漢書』徐樂伝には「王公大人、名族之後」とも見える。

ところで陳勝の敗亡を当然とみるものに楚の范増がいた。范増時に年七十、家居して奇計を好んだ。項梁にこう説いた。「陳勝の敗るるは固より当れり。夫れ秦六国を滅ぼし、楚最も罪なし。懷王の秦に入りて反らざるより、楚人これを憐れみて今に至る。故に楚の南公の曰わく『楚は三戸なりと雖も秦を亡ぼすは必ず楚ならん』と。今陳勝事を首めとして楚の後を立てずして自立す。その勢い長からざるなり。今君は江東より起り、楚の讒起の將たり。皆な争いて君に附くは、君の世々楚の將たれば、為によくまた楚の後を立てんと以えばなり」。項梁はこの意見に従った。民間の牧羊に身を落していた楚の懷王の孫の心を探し出すと祖諡そのままに「楚懷王」と号させ盟主とたてた。これも民衆の輿望に応じてのことであった。「從民所望也」(項羽本紀)である。

要するにかつて陳勝や陳嬰が托した楚將項氏の家格ではなお不足で、六国の後裔のうちでも最も悲劇的な最後をと

げた、それなりに民衆の同情も強い楚の懷王の血統を担ぎ出してはじめて天下をうかがうに足る看板とすることができるといのである。張耳陳餘の上をいく意見であった。

項羽が咸陽の街に攻め入り、子嬰を殺して天下の盟主となると、范增の戦畧はまさに成功した。鴻門の会での失敗はあったものの、いまや天下は項羽のものであった。ではどのように支配するか。いうまでもなく義帝楚懷王を頂点とする封建国家体制でなければならない。それはこの度の鬪争が戦国の六国後裔軍の連合体が秦に復讐戦を挑んだものだからである。それならば勝利の後には旧六国の復活、再配置がなされなければならない。さながら歴史は逆戻りしているようである。

楚懷王を義帝とたて、項羽自らは西楚霸王と称して楚の九郡を領有し、劉邦を巴蜀に王とし、各地に十八王をたてて項羽の天下が開始された。漢の元年のことである。ひとまず戦端は納まった。この時項羽は故郷の楚に王たることを選んだ。「関中は山河を阻て四もに塞れり。地肥饒にして都し以て覇たるべし」と進言するものもあったが、項羽は秦の咸陽の宮室がすべて残破しまた故郷への思いもあって「富貴にして故郷に帰らざるは、繡を衣て夜行するが如し。誰れかこれを知る者ぞ」と正直な思いを述べる。これを聞いて「楚人は沐猴にして冠するのみ」と世人は酷評した(項羽本紀)。人間の規模が小さいということであろう。この時項羽はまだ二十代後半であった。

その翌年、項羽は「天下の率となりて不平……、故王を醜地に王としその群臣諸將を善地に王とす」(項羽本紀)といった不満の声を挙り、さらに「項王人を信ずること能わず、その信愛する所は諸項に非ざれば、即ち妻の昆弟。奇士ありと雖も用うること能わず……」(陳丞相世家)と楚に見切りをつけるものもあり、まして主のいない中原の現状もあってその獲得をめざして再度の内戦に突入する。いわゆる楚漢の争いである。

四

高祖は楚漢の争いに決着をつけると亡秦孤立の敵に懲戒して同姓及び諸功臣を封建して藩屏とした。郡国制と称されるものである。しかし法制面は多く秦制をそのまま踏襲した(『史記』礼書・曆書、『漢書』百官公卿表)。なお独自の法

をたてる余裕をもたなかったからである。この時高祖が封建した諸侯王の規模は「藩国の大なる者は州に跨がり郡を冀ね、連城數十、宮室百官制を同じゅうす」(『漢書』諸侯王表)るものであった。大盤振舞いであった。このことを高祖自ら晩年に「吾れ天下の賢士功臣に負くなしと謂うべし」(高祖本紀十二年の条)と語る。誰れにも借りはないというわけである。諸功臣らの立場からすれば自らの希望は満たされ労苦は酬いられたわけである。それでは新興の漢王朝は、万事これでうまくいって問題は存しなかったのであるうか。

統一直後、きわめて軍事的な見地から四塞の秦地こそ天府と長安遷都を説きこれを断行せしめた劉敬は、その後の首都長安の防衛に関して次のような意見を具申する。漢の七年、韓王信が匈奴に逃亡し俄に北辺が騒がしくなった時のことである。いったい諸侯が反秦の行動にはじめて起ち上った時、「齊の諸田、楚の昭屈景に非ざれば興つなし。今陛下関中に都すと雖も、実は人少く北は胡寇に近く、東に六国の族宗の疆きあり。一日変あらば、陛下未だ枕を高くして臥するを得ざるなり」したがって「臣願わくは陛下、齊の諸田、楚の昭屈景、趙韓魏の後及び豪傑名家を徒して関中に居らしめよ。事なければ以て胡に備うべく、諸侯変あらば亦た率いて以て東伐するに足る。此れ疆本弱末の術なり」(劉敬伝)。

要するに、①六国の後裔、齊の諸田や楚の昭屈景氏らの地方における絶大な実力、影響力を認め、彼らの力をその土地から引き離すことよって弱め、②かつこれを人口の少い関中に移住させて北の脅威匈奴に対抗せしめ、③東方諸侯に変事のあつた際には彼らで対応する、という一石三鳥の策である。漢の国家にとつても警戒すべきものは、六国の後裔・名族の力と北方匈奴、及び諸侯国の動向とであった。この点、始皇期に存在しない諸侯国の動向ということを除いて考えれば、基本的に秦と漢とで事情は変らない。

劉敬の遷徙策はこの奏言のあつた年に関中に「十余万口」を移住せしめて実現する。その条の索隠に小顔のことばとして「いま高陵櫟陽の諸田、華陰好時の諸景、及び三輔の諸屈諸懷なお多きが、皆な此の時に徙りし所なり」(劉敬伝)とみえる。こうした遷徙策は、実は古く秦のときにすでに実行されていた。「始皇二十六年、天下の豪富を咸陽に徙すこと十二万户。三十五年、三万户を驪邑に、五万户を雲陽に徙し、皆な事を復せざること十歳。三十六年、河北榆中に三万家を遷す」(始皇本紀)。三十五、六年の場合もだんに人口を移したというに止まらずその地の名族豪家を含め

ての強制移住ということであつたらう。こうした移住問題をも含めて北方問題に精力をすりへらし、これが秦滅亡、そして今日にまで続く疲弊の因であると説くのが、呂后期の人季布の意見であつた。事情はこうである。匈奴と漢との外交關係が兄弟として結ばれていた呂后期、単于は不遜な態度をとり続けた。これに怒つた樊噲は主戦論を唱え匈奴討つべしと叫んだ。季布は反対した。理由はこうである。高祖もかつて匈奴に雪中に閉じこめられ痛苦を味わされた。「且つ秦は胡を事とするを以て陳勝ら起る。今において創夷未だいえず。噲また面諛し天下を騒動せんとす」。この時「殿上皆恐」(季布伝)とある。ことばが不足している文なのであるが、要するに秦の動乱、陳勝の起義、その後の内戦による疲弊、もとはすべて匈奴問題への対応の失敗にこそあつた。それほど重要な問題なのである。ただ勇ましいだけであつてはならない、というのである。

ところで始皇本紀二十六年の条には「秦は諸侯を破るごとにその宮室を写放しこれを咸陽北阪上に作り……得る所の諸侯の美人鐘鼓を以てこれに充つ」とみえる。始皇帝は統一前の早い時期から計画的に各地の秀れた文物・工芸、はては職能集団までも関中にもちこんでいる。むろん人集めも行われたであらう。あらゆる才能が咸陽に必要だつたからである。

地方の名族にとってその土地からの離脱、すなわち遷徙は彈圧以外の何ものでもなかつたであらう。生まれついで土地があつてこそその名族豪家だからである。恐らく始皇帝はさまざま手段名目で六国の後裔・名族を彈圧排除していったことであらう。張耳らのことばにも「夫れ秦は無道を為し、人の国家を破り、人の社稷を滅し、人の後世を絶ち……」(張耳陳餘伝)とある。無道の内容は六国を滅ばし人の後世を絶つそのことなのである。楚が亡んで僅々十数年の間に、懐王の孫心は羊飼いにまで落魄する。本人の無能の故もあらうが、そうせねば生きられぬ事情があつたからであらう。

それにもかかわらず六国の後裔たちが生き残つて反秦軍のリーダーとなつていたこと、劉敬の指摘のとおりである。土地人民との歴史的な關係、いわゆる地縁人縁が複雑にからみ合つてかれらを支えているのである。そして人々はそこに特殊な運氣も見出しているのである。だからこそ陳勝は扶蘇項燕に名を籍り、張耳陳餘は六国の後を立てよと説き、陳嬰また楚將項氏に依りどころを求め、范增は楚懷王に人氣を求めたのである。

しかし、きまつて名族の運氣に頼らねばならないのであろうか。時代は陳勝のいういま一面の「王侯將相……」の実力のものという時代に入つてもいるのではないか。こうした關係を語つて次の逸話は示唆的である。漢の三年、項羽に包囲されて窮地に立つた高祖と麗食其、張良との間のやりとりである。

漢の三年、項羽急に漢王を滎陽に囲む。漢王恐憂し、麗食其と楚の権を撓すことを謀る。食其曰わく、昔し湯桀を伐ちその後を杞に封じ、武王紂を伐ちその後を宋に封ず。今秦徳を失ひ義を棄て、諸侯の社稷を侵伐して六國の後を滅し、立錐の地なからしむ。陛下誠に能く六國の後世を復立し、畢くに印を受けしむれば此れ君臣百姓、必ず皆陛下の徳を戴き、風に郷い義を慕い、臣妾たらんと願わざるなけん。徳義已に行われ、陛下南郷し覇を称せば、楚は必ず枉を歎めて朝せん。

漢王曰わく、善し。趣やかに印を刻し、先生因り行きて之を佩ばしめよ。

食其未だ行かず。張良外より來り謁す。漢王方に食せんとして曰わく、子房よ、前め。客の我が為に楚の権を撓すを計る者あり、と。具さに麗生の語を以て子房に告げて曰わく、何如と。

良曰わく、誰れか陛下の為に此の計を画する者ぞ。陛下の事去らん。

漢王曰わく、何ぞや。

張良對えて曰わく……、且つ天下の游士、その親戚を離れ墳墓を棄て、故旧を去り陛下に従ひ游ぶ者は、ただ日夜咫尺の地を望まんと欲すればなり。今六國を復し、韓魏燕趙齊楚の後を立つれば、天下の游士各々歸りてその主に事え、その親戚に従い、その故旧墳墓に反らん。陛下相いと与に天下を取らんや……、誠に客の謀を用いなば陛下の事去らんのみ。

漢王食を輟め哺を吐き罵りて曰わく、豎儒幾んど而公の事を敗らんとす(劉侯世家)。

六國の後を復活させることは、現状では楚の勢力に対抗して有利であろうが、次にいっそう面倒な敵を作ることになり、それでは高祖に与えられたいまのチャンスを佚してしまうというのが張良の意見である。麗食其は、張耳陳餘らの発想と等しく、張良は次の事態を予測してこれを不可とし、高祖またその政治的判断の正しさに気がついた、ということである。端的にいえば、なお存在感はあるが、六國の後裔・名族たちは、いまや過去の亡霊なのである。

手を借して活き返らせてはならないのである。ここに「王侯将相……」の時代相が姿をあらわす。

そしてこういう意見を述べる張良その人が、歴世韓の宰相の家の出という真正の名族の一員であった。やがて、人間の事をすて赤松子に従いて游ばんとする張良の処世は、自らの階級の運命に同調しているかの如くであった。

五

巨大な秦、大國楚の滅亡は何にもまして漢初の人々のひとしい驚きであった。天下を克ちとった高祖は、漢の五年沔水の陽に皇帝位に即いたその夏の五月「列侯諸將、敢て朕に隱すことなく皆なその情を言え。吾れの天下を有せし所以の者は何か。項氏の天下を失いし所以の者は何か」尋ねている。高起王陵は項羽と高祖の人間的な度量の差によると答え、これに対して高祖は、項羽は一范増すら使いきれなかったが、漢は張良蕭何韓信という三人の人傑を使いこなした、これがその差なのだと誇る（高祖本紀）。これも一つの解答ではある。さらに何故秦は敗れたかを「試みにわがために秦の天下を失いし所以、われの天下を得し所以のものは何か、及び古（今）成敗の國を著わせ」と諮問し、これに答えて陸賈が提出した解答が『新語』十二篇である。一篇ができ上り献上されるたびに高祖はでき栄えを誉め、群臣もそのつど万才を称した（陸賈伝）。要は高祖が儒生陸賈に秦漢交替の秘密を問い、陸賈はそれなりの解答をして群臣をも含めて満足させた、ということである。

やや遅れて賈誼は「過秦論」を書きこの主題に正面から答えようとする。その論旨は、ひたすら刑法に任じて仁義を施すことのなかった誤りが、やがては民衆の離反を招きついにそれが生命取りとなった、という。司馬遷もこの意見に賛成であったらしく、始皇本紀の末尾にこれを紹介している。「過秦論」中下篇からのもので、もし「二世にして庸主の行ありて忠賢に任じ、臣主心を一にして海内の患を憂い、縞素して先帝の過を正し、地を裂き民を分ち、以て功臣の後を封じ……」たならば、四海のうちは各々その処に安んじていまなお平穩であつたらうという。要は法刑に任じ独裁を行つて封建を忘れたが故の滅亡とするのである。

たしかに巨大な秦の崩壊の秘密は尽きぬ興味を人々に与える。多くの人々がその原因を考えたであろう。「李斯」

伝の後半、すなわち始皇没後の部分などは明らかにこうした空気を背景にして眞實をとりまぜて作り上げられた創作話のように思われる。二世の伝記や李斯伝の後半部は、亡ぶがわの事情を縷々と説明する。そして最終的に秦の王朝の後をうけるものが劉邦、高祖であるならば、新興の理由もその人になければならない。『史記』高祖本紀はこの点を説いて明快である。

劉邦は貧家の出である。「父は太公と曰い、母は劉媪と曰う」だけの家で、特別に誇るべき何らのものもない。それにもかかわらずこの沛の農民の子は、並みいる六国の後裔、名族の出の將軍たちをしり目にして天子の座につく。それは何故なのか。

「高祖本紀」の前半は、劉邦をめぐる神怪なできごとで埋めつくされている。「その先劉媪嘗て大沢の陂に息う。夢に神と遇う。是の時雷電晦冥す。太公往き視れば則ち蛟龍をその上に見る。已にして身みるあり。遂に高祖を生む」。蛟龍こそ劉邦の父である。いわゆる異常出生譚である。そしてこの出生の秘密、不思議さが後々までついてまわる。泗水の亭長時代「常に王媪・武負に従いて酒を貰ひ、酔いて臥す。武負・王媪その上に常に龍あるをみ、これを怪しむ」。またこの地方のボス呂公は劉邦を一見してその相にうたれて娘を嫁がせ、この地を過ぎる一老父また劉邦の相の高貴さに驚く。一一記述することを省くが、自らの軍団を形成してからも神怪なできごととは継起し、こうした不思議さに劉邦自らはうなずくところがあつた。「高祖乃心独喜自負」。そして「諸もろの従う者日に益ます畏る」ともある。

この後も山中に亡匿した劉邦の居所に「常に雲氣あり」であつた。「雲氣」とはいうまでもなく「靈氣」である。沛の子弟、父老らはこの「雲氣」に自らの将来を賭けた。「沛中の子弟或いはこれを聞き、附さんとする者多し」「平生聞くところの劉季のもろもろの珍怪は貴に当る。且つ卜筮するに劉季の最も吉なるに如くはなし」かくて劉邦は沛の領導となつた。

『史記』の描く高祖の半生の記録は、つねに神怪なものに覆われている。こうした記述は項羽や始皇帝には見られない。かれらは紛れもない名族の出であり、ことさらに家門やその運気を贅言するまでもない。これに對して劉邦は何らの家格も特別の運氣もない。これに代り最も衆を納得させる何かを持ち主張しつづけなければならぬ。かくして創出されたものこそかれの生涯、やがては漢の王朝の根柢ともなる「龍王の血」の神怪譚であつた。

これは二つの大きな効用をもたらした。一つはこれによつて劉邦自身家門コンプレックスを乗り越え、世間の六国

の後裔・名族の運氣信仰をも超えることができた。たび重なる不思議なでき事からいまや龍王の子、異能者劉邦にだれも疑義をいだく者はいない。かれは勝つべくして勝ち進む。新しくわかり易い英雄のイメージである。そしてよいよ勝ち進むとき、その存在はますます衆に絶異したものと映じてくる。そして二つに、この時代が実力を争う時代であったことも事実である。力は新しい力と競わねばならない。どこかで実力競争に歯止めがかけられねばならない。高祖は自らの行動や本性を神秘のベールで覆うことによって、時代の実力主義に制動をかけた。異能の人高祖は、争うべき通常の相手ではない、と。まことにうまい構想であった。

問題は高祖集団、あるいは天下にこの相違をいかに広く恒常的に理解させるか、であった。ここに戦陣の儒生、叔孫通の出番があった。漢の七年十月、長樂宮はなり諸侯群臣ここに朝会の礼をとった。叔孫通の実習どおりに礼の約束ごととは守られて朝会は進行する。「諸侯王より以下振恐肅敬せざるはなし」(叔孫通伝)。むろん諛譎し礼を失する者もない。「吾れ迺ち今日にして皇帝たることの貴きを知れり」とは正直な述懐であった。いかにこれをタイトにするかこそが次の課題であった。むろん実践こそ優先した。理論はなお先きのことである。

たしかにこの時の叔孫通の礼法が真の礼楽の精神に適ったものかどうかには疑問があろう。叔孫通の召集を拒否した魯の二人の儒生の意見もある。しかし戦塵から離れることの遠くないこの時点の礼法としては、これを以て可とせねばならない。むしろ積極的にこの時期に君臣間の上下の分別を明確にし、この秩序づけ、つまり政治世界に儒教の考える序列づけこそ必須なのだ」と為政者に知らしめた叔孫通の業績を多とすべきであろう。この頃の社会状況を『漢書』はこう記している。

「漢興りて秦の敝を接ぎ、諸侯並び起ち、民作業を失いて大いに饑饉す。凡そ米石ごとに五千、人相い食み、死する者半ばを過ぐ。高祖乃ち民をして子を売り食に蜀漢に就くを得しむ。天下既に定まるも民に蓋藏なし。天子より醇駟を具うるに能わず、将相或いは牛車に乘れり」(食貨志上)。またさきの劉敬は、漢の五年の情況を「今陛下豊沛より起り、卒三千人を収め、これを以て徑ちに往きて蜀漢を巻き三秦を定め、項羽と滎陽に戦い、咸阜の口を争う。大戦七十、小戦四十、天下の民をして肝腦地に塗れ、父子をして骨を中野に暴さしむること数うるに勝らべからず。哭泣の声未だ絶えず、傷痍の者未だ起たざるなり……」(劉敬伝)。

この期の儒生には、孔子の八世の孫孔甲、名は鮒のような人物もいた。「鮒年五十七、陳王涉の博士となり陳下に

死す」(孔子世家)。「陳渉の王たるや魯の諸儒、孔子の礼器を持し、往きて陳王に帰す。是に於て孔甲、陳渉の博士となり卒に涉とともに死す」(儒林伝)。さらに何故こうなったかを「陳渉匹夫より起ち、瓦合の適戍を駆り、旬月にして以て楚に王たるも半歳にして竟に滅亡す。その事至つて微浅なり。然れども縉紳先生の徒、孔子の礼器を負いて往きて質を委ねて臣とならんとする者は何ぞや。秦のその業を焚くを以て、怨みを積みて憤りを陳王に発すればなり」(同上)と説明する。

秦の儒教弾圧の下で逼迫を余儀なくされた儒生が、反秦いわば六国への回帰を目ざした陳渉らの起義に期待をかけた力を籍した、というものである。「孔子の礼器を負いて」というのからすると、たとえば同じ儒林伝で「高皇帝項籍を誅するに及んで兵を挙げて魯を囲む。魯中の諸儒なお講誦し、礼楽を習い、弦歌の音絶せず……」といった生来習い覚えた礼楽による教化、その分野での活動を夢みてのことであろう。むしろ礼楽の講習が、いつでもどこでも可能ならぬわけではない。しかし一般の儒生にとつてできることといえば、これを措いて他にはない。

秦の国家にも博士官があり、皇帝の側近にいて必要な諮問に応え、刻石の文辞も考え、仙真人の詩なども作つたこと周知のとおりである。「尚書」の最終的な編成も秦代ではないかと思われ、また天子の制度として度量衡等の統一を把握する『中庸』二十八章のすぐれて政治的な思弁もこの期の儒生のもものと思われる。焚書坑儒といひながら秦の懐は、なかなか深いものがあつた。動乱の中で伏生も地方に潜み、時節の到来を待ち続ける。いづこかで儒教教義を学びとつた陸賈は「時々前み説くに詩書を称」(陸賈伝)し、劉敬また匈奴に礼節を風諭せよと説く。かれらはいわば戦陣の儒生であつた。そして次第に高祖の志向を武から文へと導いていく。

漢初においてもつともポピュラーな儒生といふべきものは、曹相国世家にみられるところのものである。恵帝元年曹参は新任の地斉に赴いた。そこで「尽く長老諸生を召し、百姓を安集し斉の故俗の如くする所以を問う。諸儒百を以て教うるも、言人々にして殊なり、参未だ定むる所を知らず」(曹相国世家)とある。斉魯の土地柄として儒生の頭かずだけは多かったが、統一的实际的なまとまつた意見は得られなかつた。当時の儒生には春秋戦国とはすつかりサマ変りした秦漢期の政治世界にこれといった明確な参入の図式がまだ立たないのである。儒教はまさに時代に適應すべく自らを再構築中であつた。

こうした中で叔孫通は、俗儒といわれながらも時勢に適った対応をして儒教を政治世界に定着化せしめていく。とりあえず儀礼として公けの場に儒教を押しこんでいく。それが高祖の待望でもあった。太史公は、こうした叔孫通を、時勢とともに進退しつづ「卒に漢家の儒宗となる」(叔孫通伝贊)と評価する。まことに至当の言である。

呂后本紀の贊にこうある。「孝恵皇帝高后の時、黎民戦国の苦を離るるをえ、君臣俱に無為に休息せんと欲す。故に恵帝垂拱し、高后女主もて制を称す。政りごと房戸より出でず。天下晏然として刑罰用うることを罕なり。罪人はれ希し。民稼穡に務め、衣食滋殖す」。『漢書』も「孝恵高后の間に衣食滋殖す」(食貨志上)という。そしてこの時代を承けて冒頭にも掲げた代の宋昌の漢王朝安定宣言があり、続いて賈誼の服色改正、王朝の独自性追求案も提出される。漢はここに至ってようやく自らの王朝の成り立ちを考え併せて自らを明確に主張しようとする余裕をもつに至った。むろん新たな難問も登場する。しかし時代は変った。ひとまずこれが文景期を迎えての実感ではあった。